

# 教育課程と教育方法が学修成果におよぼす影響

神田 直弥

東北公益文科大学総合研究論集第35号別冊 抜刷

2019年3月10日発行

## 研究ノート

# 教育課程と教育方法が学修成果におよぼす影響

神田 直弥

## 1. はじめに

平成29年4月1日より施行された改正学校教育法施行規則により、「卒業の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー）」「教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）」「入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）」の、いわゆる三つのポリシーの策定、公表が義務付けられた。本学ではディプロマ・ポリシーとして「幅広い知識と専門知識とともに、地域を牽引していく実践力を磨くため、カリキュラムを通し、以下の4つの力を身に付ける。」とし、「コミュニケーション力・発信力」「国際感覚」「創造力・企画力」「リーダーシップ」を設定している<sup>1</sup>。

ディプロマ・ポリシーを達成するための教育課程の編成方針がカリキュラム・ポリシーであるが、本学では4つの力に対応づけて、表1に示す方針を定めている。

表1 カリキュラム・ポリシー<sup>2</sup>

コミュニケーション力・発信力	授業運営においては、教員からの一方的な講義だけでなく、学生同士でのグループワークの実施や成果を発表する機会を多く取り入れる。
国際感覚	外国語科目を2年次まで必修とするとともに、国際関係論や海外や日本の文化等を学ぶ科目を配置する。更に、英語圏、中国語圏の大学で語学を学ぶ短期語学留学を配置する。
創造力・企画力	地域の人々とのコミュニケーションを図りながら、地域の課題を発見・分析し、問題解決への解を見つけ、提言を行う能力を涵養するため、応用演習科目を配置する。
リーダーシップ	地域企業の創業者から講義を受ける“トップセミナー”を配置するとともに、地域の企業と連携しインターンシップの充実を図り、学生の目的意識に応じた複数のインターンシップを配置する。

教育の質の保証については、中央教育審議会の答申において、繰り返し指摘されているが、例えば、30年11月に取りまとめられた「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」では、「教育の質の保証と情報公表」として、

<sup>1</sup> [http://www.koeki-u.ac.jp/academics/koeki-u\\_policy.html](http://www.koeki-u.ac.jp/academics/koeki-u_policy.html)にて公表。

<sup>2</sup> 上記URLにて公表する情報に基づき筆者加工。

三つのポリシーに基づく体系的で組織的な教育の成果について点検・評価を行うことで、不断の改善に取り組む必要性を指摘している<sup>3</sup>。

本学では、平成28年度より大学教育再生加速プログラム（テーマV）に採択され、卒業時における質保証の取り組みの強化を進めている。その一環として、ディプロマ・ポリシーに定める4つの力について、達成状況を客観的に評価するため、評価の観点となる評価規準と、5段階の到達段階を定めた評価基準を設定するループリックの開発を進めている。評価基準の設定にあたっては、学生からの意見や教員を対象にしたFDを通して20項目を定め、さらに産業界の意見を踏まえて修正を行い、今年度より表2に示す22項目を定めている<sup>4</sup>。その上で、これらのスキルを授業を通して育成することとし、シラバスに育成をするスキルを明示している<sup>5</sup>。

表2 4つの力の評価規準

コミュニケーション力・発信力	国際感覚	創造力・企画力	リーダーシップ
読解力 文章表現力 傾聴力 発信力 批判的思考力 会話力	外国語活用能力 自文化理解力 多文化理解力 世界の動きへの関心 日本の動きへの関心	情報収集力 論理的思考力 柔軟性 課題発見力 問題解決力	決断力 主体性 感情制御力 協働力 マネジメント力 セルフモチベーション

学修の成果を評価する方法として、本学ではループリックだけでなく、授業評価アンケートを実施している。パソコンまたはスマートフォンを用い、所定のWebページにアクセスして回答する方式である。アンケートの項目は、履修者自身に関する設問、教員・授業に関する設問、ディプロマ・ポリシーに関する設問、庄内地域の理解に関する設問、自由記述欄で構成されている。このうち、ディプロマ・ポリシーに関する設問は、表2に示す各スキルについて、当該授業を通して向上が見られたかどうかを尋ねるもので、向上したスキルを

<sup>3</sup> 中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」平成30年11月26日、[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin\\_icsFiles/afiedfile/2018/12/20/1411360\\_1\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin_icsFiles/afiedfile/2018/12/20/1411360_1_1_1.pdf)（2019/1/10参照）

<sup>4</sup> 東北公益文科大学「文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）テーマV 卒業時における質保証の取組の強化 平成29年度事業報告書」2018年

<sup>5</sup> 当初20項目としていたが、産業界の意見を受けて「会話力」「セルフモチベーション」を追加した。追加をした時期の関係で、今年度は当初設定した20のスキルの育成を行っている。

チェックして回答する。

本稿では、授業評価アンケートの分析結果を整理することで、カリキュラム及び教育方法の点検・評価を行い、質保証の取り組みを推進するための方策を検討することを目的とする。

## 2. 方法

本年度の春学期（S1クォーター、S2クォーターを含む）開講科目において実施されたアンケート結果を基に、ディプロマ・ポリシーに関する設問に対する回答について分析を行った。

## 3. 結果

### 3.1. 全体傾向

まず、各授業におけるアンケート回答率を調べた。回答率は1.4%から100%まで幅があった。

次に、スキルごとに集計を行った。図1は少なくとも履修をした科目1つ以上で、各スキルが向上したと回答している者の割合である。読解力（74.8%）や傾聴力（67.8%）、文章表現力（66.6%）、課題発見力（61.6%）、情報収集力（60.8%）が6割を超えている。全体的に見ると、「コミュニケーション力・発信力」及び「創造力・企画力」に関連するスキルについては向上したと回答する者が多く、「リーダーシップ」に関するスキルが向上したと回答する者は少ないことがわかる。

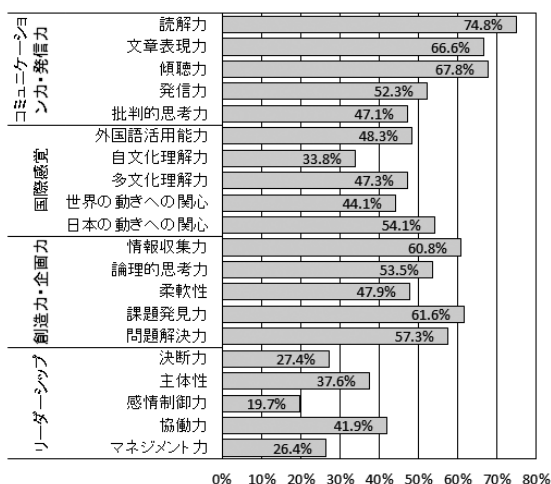


図1 各スキルが向上したと回答した者の割合

### 3.2. 学年別の傾向

図2は「コミュニケーション力・発信力」に関する5つのスキルについて、向上したと回答した者の割合を学年別に示したものである。学年により割合に差が見られるかどうかを調べるため、それぞれのスキルについて $\chi^2$ 乗検定を実施した。その結果、読解力 ( $\chi^2(3)=37.6, p<.01$ )、文章表現力 ( $\chi^2(3)=34.4, p<.01$ )、傾聴力 ( $\chi^2(3)=34.8, p<.01$ )、発信力 ( $\chi^2(3)=43.8, p<.01$ )、批判的思考力 ( $\chi^2(3)=30.3, p<.01$ ) のいずれも有意であり、残差分析の結果、1年生が有意に向上したという回答の割合が高かった。他の16のスキルについても、すべて $\chi^2$ 乗検定の結果は有意であり、1年生が他の学年よりも向上したと感じていた。

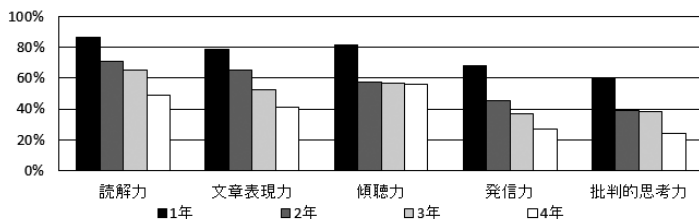


図2 学年別スキル向上（コミュニケーション力・発信力）

### 3.3. 授業方法別の傾向

本学ではアクティブ・ラーニングの手法として、課題学習、PBL、グループワーク、フィールドワーク、プレゼンテーション、ディベート、振り返りの7種類を定めており、各授業で用いる手法について、シラバスにチェックをつけて示している。

それぞれの手法の実施とスキルの向上の関係を調べるため、授業での実施の有無別に、スキルが向上したと回答した者の割合を整理したのが表3である。

$\chi^2$ 乗検定の結果、各教育手法の実施と非実施の間に有意な差が見られた場合は、向上したと回答した者の割合が多い方を網掛けして示している。網掛け部に着目すると、グループワーク、フィールドワーク、プレゼンテーション、ディベート、振り返りの実施により、「創造力・企画力」「リーダーシップ」に関するスキルが向上している。「国際感覚」に関するスキルについては、むし

ろアクティブ・ラーニングの手法を用いていない方が向上する傾向が見られる。「コミュニケーション力・発信力」に関するスキルのうち、傾聴力、発信力、批判的思考力はアクティブ・ラーニングの各手法を用いた方が向上しているように見える。

表3 授業方法別スキル向上

	課題学習		PBL		グループワーク		ファシリテーション	
	非実施	実施	非実施	実施	非実施	実施	非実施	実施
読解力	44.8%	39.4%	42.7%	37.0%	42.6%	42.0%	43.0%	22.7%
文章表現力	29.0%	28.4%	28.4%	34.3%	27.9%	30.0%	28.8%	27.8%
傾聴力	41.5%	36.2%	39.3%	36.5%	35.7%	44.3%	38.6%	55.7%
発信力	17.2%	20.3%	18.5%	19.9%	11.8%	29.1%	17.2%	62.9%
批判的思考力	14.3%	17.4%	15.5%	19.3%	15.9%	15.3%	15.8%	11.3%
外国語活用能力	15.3%	15.0%	15.4%	10.5%	15.1%	15.3%	15.6%	0.0%
自文化理解力	9.8%	8.7%	8.9%	15.5%	10.8%	7.0%	9.4%	7.2%
多文化理解力	15.8%	12.7%	14.0%	21.0%	16.5%	11.2%	14.2%	20.6%
世界の動きへの関心	14.0%	10.9%	12.0%	22.1%	14.9%	9.0%	12.9%	2.1%
日本の動きへの関心	23.6%	18.0%	20.9%	24.3%	21.6%	20.3%	21.5%	7.2%
情報収集力	22.8%	25.6%	24.0%	25.4%	19.7%	30.7%	23.4%	43.3%
論理的思考力	20.5%	26.8%	23.4%	22.1%	23.8%	22.6%	23.6%	15.5%
柔軟性	16.2%	16.6%	16.5%	14.9%	13.6%	20.7%	15.7%	38.1%
課題発見力	23.2%	27.7%	24.9%	29.3%	18.3%	35.8%	24.6%	44.3%
問題解決力	21.2%	26.8%	23.1%	33.7%	20.7%	28.3%	23.6%	27.8%
決断力	7.7%	7.1%	7.3%	9.9%	6.3%	9.2%	7.3%	9.3%
主体性	14.1%	12.8%	13.9%	8.3%	9.2%	20.2%	12.9%	35.1%
感情制御力	5.2%	5.0%	5.2%	3.3%	4.5%	6.0%	4.9%	10.3%
協働力	12.4%	15.4%	13.9%	12.2%	7.2%	23.9%	13.1%	35.1%
マネジメント力	6.0%	5.0%	5.7%	3.9%	2.3%	10.6%	5.6%	5.2%
	プレゼンテーション		ディベート		振り返り			
	非実施	実施	非実施	実施	非実施	実施		
読解力	43.1%	40.1%	41.9%	47.1%	42.9%	42.0%		
文章表現力	29.7%	25.7%	28.3%	33.6%	28.9%	28.6%		
傾聴力	39.5%	37.8%	38.4%	46.8%	36.8%	40.6%		
発信力	14.4%	32.2%	17.7%	27.9%	19.3%	18.1%		
批判的思考力	15.8%	15.2%	13.4%	38.6%	9.3%	19.9%		
外国語活用能力	15.7%	13.2%	15.3%	13.2%	25.1%	8.5%		
自文化理解力	10.3%	6.1%	9.4%	7.9%	11.4%	7.9%		
多文化理解力	15.9%	9.5%	14.3%	15.4%	16.3%	13.1%		
世界の動きへの関心	13.2%	10.6%	11.9%	20.0%	11.6%	13.3%		
日本の動きへの関心	21.7%	19.0%	21.0%	21.4%	15.1%	25.0%		
情報収集力	19.8%	37.8%	24.9%	15.0%	22.6%	25.0%		
論理的思考力	22.6%	25.7%	21.7%	39.6%	18.0%	26.9%		
柔軟性	14.9%	21.2%	15.5%	25.4%	13.7%	18.1%		
課題発見力	22.3%	34.6%	24.9%	28.6%	20.5%	28.3%		
問題解決力	20.8%	33.2%	22.8%	32.9%	20.2%	26.0%		
決断力	6.0%	12.0%	6.3%	18.9%	6.7%	7.9%		
主体性	12.4%	17.4%	13.1%	17.5%	8.6%	16.8%		
感情制御力	5.2%	4.8%	4.5%	11.4%	2.8%	6.6%		
協働力	12.0%	19.4%	13.2%	19.6%	10.1%	16.2%		
マネジメント力	3.4%	12.6%	5.5%	5.7%	4.4%	6.3%		

### 3.4. 科目区分別の傾向

科目区分別にスキルの向上の状況について示したのが表4である。各スキルについて $\chi^2$ 乗検定を行い、他の科目区分と比べて有意に向上を実感した者が多い科目区分は、網掛けをして示している。網掛け部に着目すると、科目区分によって、向上するスキルが異なることがわかるが、注目すべきは専門教育科目である。学生はいずれかのコースに所属し、専門教育科目は所属をするコースの科目を中心に履修するが、コースによってスキルの向上の有無や向上するスキルが異なっていることが読み取れる。

表4 科目区分別スキル向上

	読解力	文章 表現力	傾聴力	発信力	批判的 思考力	外国語 活用能力	自文化 理解力	多文化 理解力	世界の 動きへの 関心	日本の 動きへの 関心
スタディ導入	34.4%	23.2%	49.7%	25.2%	32.5%	0.7%	12.6%	2.0%	2.6%	33.1%
教養	37.9%	26.0%	38.4%	11.5%	22.0%	2.9%	14.4%	15.4%	13.9%	24.7%
外国語	55.2%	40.8%	44.1%	19.3%	3.3%	72.6%	6.8%	25.0%	13.0%	4.5%
情報必修	29.5%	18.9%	24.2%	35.2%	4.8%	1.8%	0.9%	1.3%	1.8%	2.2%
専門 教育 科目	地域経営系共通	42.0%	19.8%	40.1%	21.6%	16.7%	0.0%	8.0%	3.7%	13.0%
	経営	28.9%	2.6%	11.8%	0.0%	10.5%	0.0%	2.6%	0.0%	19.7%
	政策	56.9%	32.0%	28.5%	4.3%	24.5%	1.2%	8.7%	11.1%	16.6%
	地域福祉	50.6%	24.1%	53.0%	21.7%	21.7%	0.0%	9.6%	12.0%	10.8%
	交流文化系共通	35.7%	24.7%	42.2%	27.6%	11.7%	32.1%	6.5%	30.5%	26.0%
	国際教養	66.7%	37.3%	45.1%	27.5%	7.8%	62.7%	7.8%	49.0%	37.3%
	観光・まちづくり	31.7%	19.3%	25.5%	7.6%	29.7%	0.0%	29.0%	24.1%	17.2%
	メディア情報	33.3%	16.7%	11.1%	19.4%	2.8%	0.0%	2.8%	2.8%	8.3%
社福士養成	25.0%	45.0%	80.0%	40.0%	10.0%	0.0%	5.0%	0.0%	5.0%	10.0%
キャリア	48.2%	45.0%	56.9%	23.6%	10.5%	1.0%	2.6%	3.2%	1.6%	18.2%
応用演習	21.9%	21.9%	50.0%	62.5%	12.5%	0.0%	9.4%	9.4%	0.0%	12.5%
リメディアル	57.1%	37.1%	2.9%	5.7%	5.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.9%
教職科目	52.0%	36.0%	36.0%	24.0%	12.0%	4.0%	12.0%	20.0%	8.0%	12.0%
	情報 収集力	論理的 思考力	柔軟性	課題 発見力	問題 解決力	決断力	主体性	感情 制御力	協働力	マネジ メント力
スタディ導入	20.5%	36.4%	11.3%	43.0%	25.8%	2.6%	33.1%	15.9%	43.7%	2.6%
教養	15.7%	31.2%	16.8%	23.4%	23.8%	9.4%	8.1%	5.7%	10.1%	3.7%
外国語	6.4%	5.7%	10.1%	8.3%	11.1%	4.5%	9.4%	1.7%	10.6%	1.4%
情報必修	56.4%	19.8%	14.5%	33.0%	35.7%	6.6%	8.8%	3.1%	15.0%	12.3%
専門 教育 科目	地域経営系共通	39.5%	29.6%	25.9%	45.1%	41.4%	15.4%	20.4%	3.7%	17.9%
	経営	11.8%	28.9%	7.9%	10.5%	17.1%	0.0%	1.3%	0.0%	1.3%
	政策	20.6%	32.0%	11.9%	20.6%	26.1%	2.8%	5.9%	0.8%	2.4%
	地域福祉	33.7%	38.6%	31.3%	65.1%	55.4%	16.9%	25.3%	9.6%	28.9%
	交流文化系共通	26.9%	15.3%	13.6%	17.2%	15.6%	7.5%	15.9%	3.2%	13.3%
	国際教養	15.7%	11.8%	13.7%	7.8%	0.0%	3.9%	7.8%	2.0%	2.0%
	観光・まちづくり	27.6%	24.1%	17.9%	35.2%	25.5%	5.5%	11.0%	0.0%	9.0%
	メディア情報	77.8%	47.2%	25.0%	13.9%	41.7%	2.8%	11.1%	0.0%	0.0%
社福士養成	35.0%	40.0%	45.0%	65.0%	65.0%	20.0%	30.0%	25.0%	70.0%	35.0%
キャリア	35.8%	15.7%	20.4%	30.7%	19.2%	8.3%	27.8%	11.5%	18.8%	8.9%
応用演習	18.8%	18.8%	43.8%	37.5%	34.4%	12.5%	28.1%	15.6%	43.8%	6.3%
リメディアル	2.9%	14.3%	11.4%	8.6%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
教職科目	20.0%	16.0%	32.0%	20.0%	24.0%	24.0%	20.0%	16.0%	16.0%	4.0%

### 3.5. 所属コース別の傾向

学生の所属コースによって差が見られるかどうかを調べたのが図3～図6である。 $\chi^2$ 乗検定の結果、有意に向上した者が多かった項目は以下の通りである。

- ・「コミュニケーション力・発信力」に関するスキルでは、「読解力」「傾聴力」は地域福祉コースが向上したと感じた者が多く、「発信力」は地域福祉コースと国際教養コースが向上したと感じた者が多い
- ・「国際感覚」に関するスキルでは「外国語活用能力」「多文化理解力」において国際教養コースが向上したと感じた者が多く、「日本の動きへの関心」については地域福祉コースと観光・まちづくりコースの学生が向上したと感じた者が多い
- ・「創造力・企画力」では、「情報収集力」は地域福祉コースとメディア情報コースが、「論理的思考力」はメディア情報コースが、「柔軟性」「課題発見力」は地域福祉コースが、「問題解決力」は政策コースと地域福祉コースにおいて向上したと回答した者の割合が多い
- ・「リーダーシップ」では、地域福祉コースが5つ全てのスキルにおいて向上したと回答する者の割合が高い

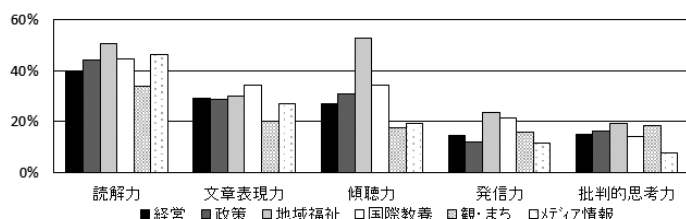


図3 所属コース別スキル向上（コミュニケーション力・発信力）

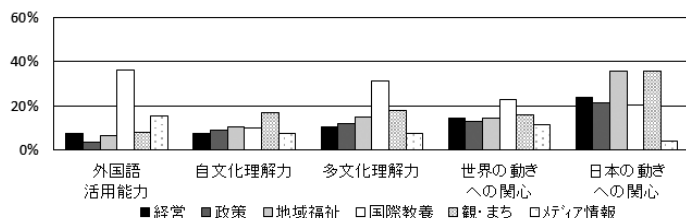


図4 所属コース別スキル向上（国際感覚）



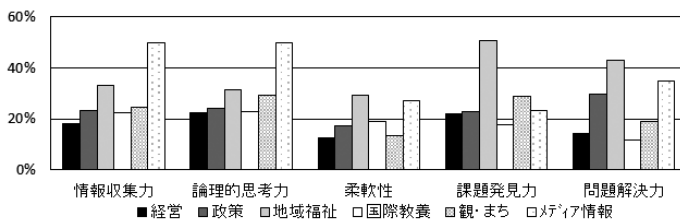


図5 所属コース別スキル向上（創造力・企画力）

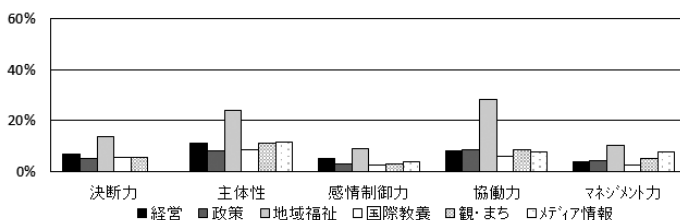


図6 所属コース別スキル向上（リーダーシップ）

### 3.6. 授業外学修時間別の傾向

授業外学修の時間により、スキルの向上に差が見られるかを調べるため、回答別にスキル向上の割合を調べた。回答の選択肢は「1時間未満」「2時間未満」「4時間未満」「6時間未満」「6時間以上」であり、いずれも授業1回あたりの時間である。図7は創造力・企画力に関連するスキルであるが、 $\chi^2$ 乗検定の結果、いずれも回答の偏りは有意であり、残差分析の結果、授業外学修が「1時間未満」の者はスキルが向上したと回答した割合が、これら5つのスキル全てにおいて有意に少なかった。

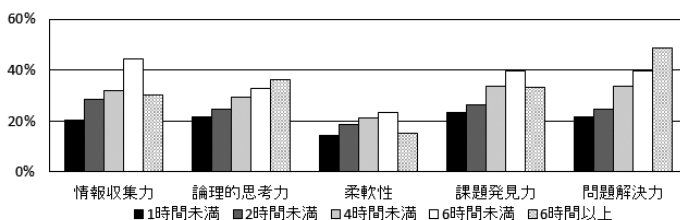


図7 授業外学修時間別スキル向上（創造力・企画力）

その他、「文章表現力」「発信力」「批判的思考力」「外国語活用能力」「決断力」「主体性」「協働力」「マネジメント力」についても、授業外学修が1時間未満の者のスキル向上の回答者の割合が有意に少なかった。

### 3.7. 数量化Ⅱ類

最後に、これまでの分析に用いた各要因のうち、どの要因の影響が大きいのかを明らかにするため、数量化Ⅱ類を用いて比較検討を行った。学年と所属コースについては相関が高いことから学年は除外し、各スキルの向上の有無を外的基準とし、科目区分、所属コース、授業方法（7種類）、授業外学修時間の10のアイテムについて判別した結果を表5に示す。なお、科目区分については、履修者が制限されるリメディアル科目、社会福祉士養成課程、教職課程は除外している。分析結果が膨大になることから、表5ではレンジ、相関比、正判別率のみ示している。

表5 数量化Ⅱ類結果（レンジ、相関比、正判別率）

	読解力	文章表現力	傾聴力	発信力	批判的思考力	外国語活用能力	自文化理解力	多文化理解力	世界の動きへの関心	日本の動きへの関心
科目区分	3.85	4.10	2.57	1.78	2.84	2.84	4.06	4.63	3.30	3.63
所属コース	1.65	0.93	2.28	0.58	0.71	0.44	0.82	0.76	0.81	1.69
課題学習	0.05	0.18	0.49	0.32	0.04	0.04	0.18	0.35	0.38	0.26
PBL	1.08	0.00	0.03	0.10	0.49	0.10	1.33	1.00	1.77	0.37
グループワーク	0.68	0.64	0.69	0.27	0.36	0.21	0.23	0.03	0.43	0.40
フィードバック	1.23	0.72	1.87	3.39	0.02	1.13	0.10	0.11	2.36	0.83
プレゼンテーション	0.05	0.29	0.27	0.53	0.01	0.10	0.14	0.79	0.19	0.07
ディベート	0.73	0.84	0.94	0.97	2.09	0.08	0.55	0.24	0.58	0.35
振り返り	0.55	0.46	0.32	0.23	0.31	0.22	0.75	0.31	0.44	0.07
授業外学修	0.82	1.29	1.12	1.15	1.41	0.64	0.97	0.65	0.94	1.14
相関比	0.06	0.07	0.08	0.12	0.10	0.54	0.06	0.11	0.08	0.14
正判別率	61.0%	62.3%	61.1%	69.2%	72.1%	91.9%	69.8%	71.5%	70.1%	68.6%
	情報収集力	論理的思考力	柔軟性	課題発見力	問題解決力	決断力	主体性	感情制御力	協働力	マネジメント力
科目区分	5.48	2.98	2.53	4.00	4.30	3.04	2.87	4.00	3.58	3.81
所属コース	0.81	1.85	1.59	1.13	1.44	1.55	1.19	0.76	0.97	1.26
課題学習	0.25	0.50	0.04	0.13	0.11	0.33	0.39	0.36	0.46	0.46
PBL	0.36	0.46	0.69	0.51	1.13	0.92	0.53	0.41	0.03	0.19
グループワーク	0.00	0.65	0.80	0.85	0.06	0.25	0.53	0.60	0.98	0.97
フィードバック	1.79	0.34	2.75	1.76	0.56	0.22	2.17	1.49	1.33	0.02
プレゼンテーション	0.45	0.66	0.13	0.20	0.44	0.85	0.45	0.17	0.02	0.27
ディベート	0.46	0.92	0.94	0.11	0.92	2.16	0.53	1.66	0.59	0.08
振り返り	0.17	0.25	0.09	0.05	0.31	0.22	0.10	0.23	0.22	0.21
授業外学修	1.06	1.56	1.18	1.14	1.93	2.12	1.12	1.33	1.38	2.12
相関比	0.14	0.09	0.05	0.12	0.09	0.05	0.10	0.06	0.12	0.11
正判別率	71.9%	63.2%	68.1%	68.2%	67.9%	75.6%	72.3%	74.3%	74.9%	81.1%

レンジは各要因が判別に及ぼす影響の大きさを表しており、値が大きい項目ほど影響度が高いといえる。スキルによっても異なっているが、科目区分、所属コース、授業外学修時間のレンジは多くのスキルで共通して大きい。授業の方法については、フィールドワークとPBL、ディベートのレンジが大きい箇所があるが、実施をしている授業が少ないことが影響している可能性がある。ただし、全体的に相関比は低く、正判別率も61.0%～91.9%であった。

#### 4. 考察

学生によるアンケートの結果の分析により、ディプロマ・ポリシーを達成するために編成されたカリキュラムや教育方法の評価を行うことができる。

図1を見ると、カリキュラムを通して学生は各スキルが向上したと評価しており、カリキュラムには一定の効果があると考えられる。ただし、「リーダーシップ」に関するスキルが向上したと回答する者が少ない点については検討の余地がある。また、カリキュラム・ポリシーでは「創造力・企画力」を育成するために応用演習科目を配置すると定めているが、表4を見る限り、応用演習科目における「創造力・企画力」に関するスキルの向上の割合は、他の科目区分と比べて有意に高いわけではない。

数量化Ⅱ類の結果を見ると、所属コースについては、特に「創造力・企画力」「リーダーシップ」に関するスキルにおいてレンジが大きく、所属するコースの専門科目を学ぶだけでは、これらのスキルの向上が難しい場合がある。したがって、コース横断的に幅広く学ぶことによって、これらのスキルの向上を図ることに加えて、授業方法に関するFD等の推進により、スキル育成の方法についてより詳細な知見を獲得し、それぞれの授業に取り入れるというような工夫が求められる。

授業方法について表3からは、アクティブ・ラーニングの導入により、特に「傾聴力」「発信力」「批判的思考力」や「創造力・企画力」「リーダーシップ」に関するスキルの向上が見られることが確認できる。一方、数量化Ⅱ類による分析結果からは、必ずしも影響度は高くないことが読み取れる。これは授業内での各手法の取り入れ方にばらつきがあるためと考えられる。例えば山口大学では、アクティブ・ラーニングの形態や授業時間内に占める割合に基づきAL

ポイントを算出している<sup>6</sup>。こうした定量的な表現を行うことで、アクティブ・ラーニングの効果に関する詳細な評価や質的な向上が可能になると考えられる。

なお、数量化Ⅱ類では授業外学修時間のレンジも大きかった。授業外学修による予習や復習、課題の実施等の重要性が確認されたと言える。今回は学修時間のみを尋ねているので、具体的な学修内容についての情報収集も今後有効になると考えられる。

今回、授業評価アンケートの分析を行ったが、質問をしているのはスキル向上の有無であり、到達状況ではない。このため、向上していないという回答が、スキルが低いことを意味するわけではない。学年別に結果を吟味した際に、1年生が有意に向上したと感じる者が多いという結果は、まさにこれによるものであると考えられる。到達段階についてはルーブリック評価が必要である。

今後の課題としては、上記への対応に加え、秋学期のアンケート結果を含めた分析を行うこと、アンケート回収率の向上を図ることがあげられる。詳細な分析を通して引き続き教育課程や教育方法の改善につなげたい。

---

<sup>6</sup> [http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/al\\_kaisetsu.pdf](http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/al_kaisetsu.pdf) (2019/1/10参照)